



Title	楚地出土文献へのいざない：陳偉等著『楚地出土戦国簡冊「[十四種]」』
Author(s)	湯浅，邦弘；草野，友子
Citation	中国研究集刊. 2010, 51, p. 141-149
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/60952
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

楚地出土文献へのいざない

— 陳偉等著『楚地出土戦国簡冊「十四種」』 —

湯浅邦弘
草野友子

一、楚地出土資料と武漢大学

一九九三年、中国湖北省荊門市の郭店一号楚墓で大量の竹簡が発見された。「郭店楚墓竹簡（郭店楚簡）」と命名された竹簡群は、やがて中国古代史や古代思想史研究に大きな衝撃を与えていくこととなる。

一九九八年、その全容が『郭店楚墓竹簡』（文物出版社）として公開されると、多くの研究論文が次々に発表されるようになった。当初は、紙媒体での発表がほとんどであったが、やがて、インターネット上に論考が掲載されるようになる。

そうした発表の場を提供したのが、武漢大学簡帛研究

中心の「簡帛網」（<http://www.bsm.org.cn>）であった。ここに、新出土文献研究は、大きな転機を迎えることとなる。郭店楚簡や、それに続く、上海博物館蔵戦国楚竹書（上博楚簡）の発見を受けて、研究は日進月歩の活況を呈し、紙媒体での発表が研究のスピードに追いつかなくなったのである。郭店楚簡や上博楚簡は楚地出土の新資料。湖北省の省都にある武漢大学は、地の利を活かして研究を主導したのである。二〇〇六年六月には、「新出楚簡国際學術研討会」を開催し、世界の研究者約百名が三日間にわたって研究発表を行った。

こうした武漢大学の活動が、また一つ大きな果実となって提供された。『楚地出土戦国簡冊「十四種」』がそれ

である。武漢大学の陳偉教授を中心とする研究グループによる大作である。

二、『楚地出土戰國簡冊「十四種」』の刊行とその意義

本書は、二〇〇三年に開始された中国国家教育部の哲学社会科学研究重大課題攻関項目「楚簡綜合整理与研究」の最終成果としてまとめられたものである。標題に「楚簡」とか「楚系簡牘」などの名称を使わず、「簡冊」とするのは、竹簡の出土地に戦国時代の他の諸侯国も一部含まれるためであるという。

その特長は、第一に、竹簡の精密な読解である。早稲田大学COEプロジェクトの協力を得て赤外線撮影装置による竹簡の撮影を行い、これまで不鮮明であった文字を確認している。釈読・注釈は、この新たな写真に基づいて行われているのである。その結果、既存の釈文などに比べて次のような点が格段に向上している。

(一) 国内外の大量の文献を参考にして、最新の研究成果を反映させている。参考した文献は二〇〇八年冬の定稿直前のものまでを含む。

(二) できるだけ竹簡の写真や現物にあたり、また赤外線撮影により不鮮明な文字を確認した。その結果、

これまでにない新解釈を多く提示した。

(三) 所屬不明となっていた竹簡残片にも注目し、それらを含めて、竹簡の分類・配列について再検討した。

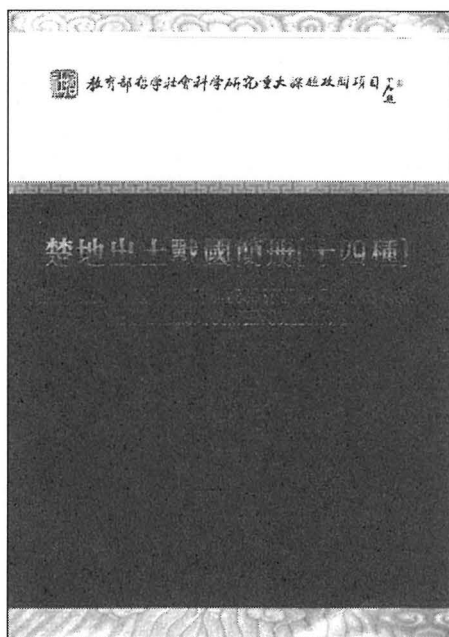
また、それぞれの竹簡ごとに説明、釈文、注釈を付し、巻末には千百にのぼる参考文献も付されている。

第二は、収録範囲の広さである。本書は、楚地出土の十四種三千五百枚の竹簡、計五万字を対象とし、それらを出土地ごとに、湖北、河南、湖南の順に配列している。

これまで、楚地出土資料はさまざまな雑誌・文献等によって別々に公開されてきた。それらを一冊にまとめた本書は、きわめて利便性が高い。十四種の竹簡を概観して、改めて、楚地の重要性が理解できる。

では、その十四種の内訳を知るために、本書の目次を掲げてみよう。

『楚地出土戰國簡冊「十四種」』（經濟科學出版社）
陳偉等著、二〇〇九年八月、B5、五五八頁、橫組繁
體字、一六八元。



一 包山二號墓簡冊

- (一) 文書
- (二) 卜筮禱祠記錄
- (三) 遣策贈書
- (四) 簽牌

二 郭店一號墓簡冊

- (一) 老子
- (二) 太一生水
- (三) 緇衣
- (四) 魯穆公問子思
- (五) 窮達以時
- (六) 五行
- (七) 唐虞之道
- (八) 忠信之道
- (九) 成之聞之
- (十) 尊德義
- (十一) 性自命出
- (十二) 六德
- (十三) 語叢一
- (十四) 語叢二
- (十五) 語叢三
- (十六) 語叢四

- (十七) 竹簡残片
- 三 望山一号墓簡冊
 - (一) 卜筮禱祠記錄
 - (二) 簽牌
- 四 望山二号墓簡冊
- 五 九店五六号墓簡冊
 - (一) 甞・梅等数量
 - (二) 建除
 - (三) 叢辰
 - (四) 成日・吉日和不吉日宜忌
 - (五) 五子・五卯和五亥日禁忌
 - (六) 告武夷
 - (七) 相宅
 - (八) 占出入盜疾
 - (九) 太歲
 - (十) 十二月宿位
 - (十一) 往亡
 - (十二) 移徙
 - (十三) 裁衣
 - (十四) 生・亡日
 - (十五) 竹簡残片
- 六 九店六二一号墓簡冊

- 七 曹家崗五号墓簡冊
- 八 曾侯乙墓簡冊
 - (一) 入車
 - (二) 甲冑
 - (三) 乘馬
 - (四) 幣馬及其他
 - (五) 簽牌
- 九 長台関一号墓簡冊
 - (一) 竹書
 - (二) 遣策
 - (三) 簽牌
- 十 葛陵一号墓簡冊
 - (一) 卜筮祭禱
 - (二) 簿書
 - (三) 未歸類簡
- 十一 五里牌四〇六号墓簡冊
- 十二 仰天湖二五簡号墓簡冊
- 十三 楊家湾六号墓簡冊
- 十四 夕陽坡二号墓簡冊

このように、本書は、包山二号墓簡冊から夕陽坡二号墓簡冊まで十四種の竹簡を掲げる。分量的に最も多いの

は、包山楚簡と郭店楚簡である。

五五八頁に及ぶ本書の意義を明らかにするために、以下では、収録された十四種の竹簡を、発見時を基準とした時系列に並べ替えてみよう（以下、本書の説明による発見年、竹簡名、総枚数、墓の造営年代から想定される竹簡の年代、の順で記す）。

- | | | | |
|------------|--------------|------|--------|
| 一九五一年 | 五里牌四〇六号墓簡冊 | 三八枚 | 戦国 |
| 一九五三年 | 仰天湖二五簡号墓簡冊 | 三九枚 | 戦国 |
| 一九五四年 | 楊家湾六号墓簡冊 | 七二枚 | 戦国 |
| 一九五七年 | 長台関楚簡 | 一三七枚 | 戦国中期 |
| 一九六五年 | 望山一号楚簡 | 二〇七枚 | 戦国中期 |
| | 望山二号楚簡 | 六六枚 | 戦国中期晩段 |
| 一九七八年 | 曾侯乙墓簡冊 | 二四〇枚 | 前四三三年頃 |
| 一九八一〜一九八九年 | | | |
| | 九店五六号楚簡 | | |
| | 二〇五枚（有字簡一四五） | | 戦国晩期 |
| | 九店六二一号楚簡 | | |
| | 一二七枚 | | 戦国中期晩段 |
| 一九八三年 | 夕陽坡二号墓簡冊 | 二枚 | 戦国中晩期 |
| 一九八六年 | 包山楚簡 | | |
| | 四四八枚（有字簡二七八） | | 前三一六年 |

一九九二〜一九九三年

- | | | | |
|-------|-------|-------|--------|
| | 曹家崗楚簡 | 七枚 | 戦国晩期前段 |
| 一九九三年 | 郭店楚簡 | 七三〇枚 | 前四世紀末 |
| 一九九四年 | 葛陵楚簡 | 一五六八枚 | 前四〇〇年頃 |

この年表から、次のようなことが分かる。第一は、竹簡枚数の増加である。一九五〇年代以降、楚地からの竹簡出土は続いているが、当初は、数十枚程度であったものが、近年では数百枚単位へと増加している。これは、楚墓の大規模な考古学的調査や盗掘などにより、大量の竹簡がまとまって発見されるようになったからである。

第二は、完簡の増加である。五里牌四〇六号墓簡冊や楊家湾六号墓簡冊などのように、初期の竹簡は多くが残簡であった。切れ切れの文字が提供されても、研究の飛躍的な進展には繋がらなかったのである。これに対して、近年出土の竹簡は、数百枚という竹簡の多くが欠損のない完簡で発見される。これは、竹簡の釈読を容易にし、研究を強力に推進する。

第三は、思想文献の出土である。一九九三年に発見された郭店楚簡は、『老子』『緇衣』など伝世文献と密接な関係を持つ文献のほか、道家系の『太一生水』、儒家系の『魯穆公問子思』『窮達以時』など大量の思想文献で占め

られていた。初期の竹簡が断片的な行政文書であったり、遣策や簽牌であったりしたのとは大きく異なる。古代思想史そのものを書き換えるかというような画期的な資料が発見されたのである。

第四は、下葬年代の特定である。初期の資料では、その年代が戦国期であることまでは分かっても、それ以上の特定がなかなかできなかった。これに対して、近年の出土資料では、墓の造営状況の分析、副葬品の鑑定、さらには同位炭素の年代測定などにより、「戦国中期」とか、「前四世紀末」といったように、年代が相当に絞り込まれている。このことは、資料の意義を解明するために重要な意味を持ち、さらには伝世文献との前後関係についても重要な研究の視点を与えてくれる。

第五は、卜筮祭禱簡と思想文献との関係である。包山楚簡、望山楚簡などには、大量の卜筮祭禱簡が含まれているが、思想文献は見あたらない。一方、郭店楚簡は、七百枚を超える分量でありながら思想文献のみで構成されていて、なぜか卜筮祭禱簡は含まれていない。今のところ、出土の事例がまだまだ少ないので、確定的なことは言えないが、これらが共存しない点には注目しておく必要がある。

以上は、本書収録の竹簡を時系列に配置し直してみ

気づいた点である。こうした操作が可能となったのも、本書が、楚地出土資料の全容を一冊に集約してくれたからに他ならない。これまで、楚地出土資料を研究するためには、さまざまな雑誌や文献に掲載された個別の論考を逐一調査しなければならなかった。しかも、それらは断片的紹介である場合も多い。全容を紹介するという本書のコンセプトがいかに意義深いか分かるであろう。

なお、楚地出土文献として、今ひとつ上博楚簡がある。上博楚簡は盗掘の結果、香港に流出し、上海博物館が買上げた竹簡であるが、その竹簡に付着した土の成分や竹簡に書かれた楚系文字の特徴から、やはり楚地出土文献であると考えられている。だが、本書では、現在刊行中である上博楚簡については対象外とし掲載していない。将来、上博楚簡を包括する増訂版が刊行されれば、まさに楚地出土簡冊の決定版となるであろう。

（湯浅邦弘）

三、『楚地出土戦国簡冊「十四種」』の構成

以下、本書の構成を具体的に見てみよう。本書は、収録する十四種の竹簡について、それぞれ最初に、

- ・いつ、どこで、どのような経緯で発見されたか
- ・竹簡の総数、およびその詳細
- ・墓葬形態、副葬品
- ・墓葬年代
- ・出土した文献の内容
- ・どのような形で整理・刊行されたか

といった資料全体としての基本的な情報を提示する。

続いて、各竹簡に含まれているそれぞれの文献毎に、竹簡の枚数、竹簡の形制（長さ、契口の位置、編綫の数など）といった書誌情報を明示した上で、各文献の「釈文」と「注釈」とを掲載している。

「釈文」「注釈」がどのような形式で書かれているのかを、以下「郭店一号墓簡冊」から、『老子』甲本の冒頭部（通行本第十九章）を例として示す。

𠄎（絶）智弃𠄎（辨），^{〔1〕}民利百𠄎（倍）。𠄎（絶）
 𠄎（巧）弃利，^{〔2〕}規（盜）惻（賊）亡又（有）。^{〔3〕}
 𠄎（絶）𠄎（偽）弃慮，^{〔4〕}民复（復）季子。^{〔5〕}……

このように、「釈文」は、竹簡に記された文字をもとに隸定したものを記し、（ ）内に釈読した文字を記載して

いる。文字は、通行字体を使用し、通行字体にないものについては字形から隸定が行われている。隸定を行うこと自体が困難な場合は、その文字の画像を掲載している。本書に記載されている文字に関する凡例は以下の通りである。

- ・異体字・仮借字を通行字体にしている場合は（ ）内に示す。
- ・誤字を正確な文字に改めている場合は（ 〓 ）内に示す。
- ・残っている筆画と文意によって文字が確定できる場合は「一」内に、また文意や他の文献によって適切に欠文を補うことができる場合も「一」内に記す。
- ・筆画がはつきりしない、あるいは残欠して判読できない文字は、□で表示する。残欠部分の文字数が確定できない場合は、……で表示する。
- ・竹簡が断裂している部分は、□で表示する。

なお、竹簡に符号がある場合、その符号は記載していない。合文符号・重文符号が付されている箇所には、符号の記載はせず、該当する文字が直接書き込まれている。文字の確定は、学術雑誌、研究書、論文集、「簡帛網」

(<http://www.bsm.org.cn/>) などに掲載されている論文を参考にしつつ、妥当と考えられる説を採用している。その詳細は、「注釈」に記載されている。

「注釈」は、整理者（原釈文・原考釈とも言う）による釈文・注釈を引用し、それに対して異説がある場合には、それぞれの説が引用されている。前掲「郭店一号墓簡冊」『老子』甲本の冒頭部分の注釈を例に挙げると、

「1」𠂔，整理者：絶。字也寫作「𠂔」。《説文》古文「絶」字與簡文略同。

智，整理者讀作「知」。

𠂔，整理者釋爲「下」，讀爲「辯」。裘按：當是

「鞭」的古文。「辯」，「鞭」音近，故可通用。裘

錫圭（2004B, 11頁）：應以讀。「辨」爲

是。……

といった形式である。

注釈に引用されている異説は、これまでに提示されているすべての説が逐一挙げられているのではなく、妥当と思われるもののみを抽出している。提示されている異説は、巻末の「主要参考文献」と対応している。右の例で言うと、裘錫圭氏の二〇〇四年の論文が引用されてお

り、同一年に複数の論文がある場合は、発表が早いものからA・B・Cと記号が付されている。

一つの文献に対して、多いものでは二百近くにも及ぶ注釈が施されているため、研究状況を知る上で非常に参考になる。

特筆すべきは、判読できなかった、あるいは不鮮明で判読が困難であった文字について、可能な限り復原を試みている点であろう。原釈文に掲載されている写真図版を確認するだけでなく、竹簡の現物の実見調査や、写真図版と赤外線撮影との照合を行った結果、多くの箇所について、釈文を改めたり、新たな解釈を提示したりしている。

また、当初字跡が確認できなかった竹簡について、赤外線撮影によって文字が書かれていたことが明らかとなったものもある。例えば、九店五六号墓四五号簡の冒頭四字「凡得坦𠂔」や「南」の字、曾侯乙一号墓の背面の題字「右令建馭大旆」などは、原釈文では画像の記録が存在しなかったが、現在は赤外線撮影によって文字の判読が可能となった。

さらに、新資料の発見によって文字の再検討を行うことができるようになったのも、一つの大きな成果である。例えば、郭店楚簡『六德』二二号簡の「以奉」の下の方

文は、「社稷」の二字ではないかとの推測が提示されていたものの、それを確定しうる論拠が薄弱であった。しかし、上博楚簡『姑成家父』三号簡に見える「社稷」の二字と、郭店楚簡『六德』二二号簡の合文とを比較検討した結果、「社稷」と確定することができたのである。郭店楚簡『老子』一号簡の「慮」の字についても、諸説紛々であったが、上博楚簡『三德』の原釈文において、「且」の字が「慮」と釈読できることが示されていたため、「慮」と認定する説が妥当であることが証明された。本書には上博楚簡の文献は収録されていないが、郭店楚簡の文字認定の際に、上博楚簡の研究成果が大きな手がかりとなっていることが以上の例からわかるであろう。

また、原釈文の竹簡の綴合や配列についても、重要な指摘がなされている。例えば、郭店楚簡『五行』一九号簡は、竹簡の上位が欠けているが、字形や筆画を対比した結果、二字分のみしか残っていない『五行』二二号簡が、実は一九号簡の残片であったことが判明した。曾侯乙七八号簡についても、冒頭の文字が赤外線撮影で「裏」であったことが判明したことにより、この竹簡が五六号簡と連続することが明らかとなった。

このように、最新の成果が豊富に盛り込まれていることは、今後の出土資料研究にとっても非常に有益である。

欲を言えば、各文献の詳細な解題があったほうがより理解が深まったであろう。どのような理由で、どの文字に確定したのかは明確にわかるが、その一方で、全体としてどのように解釈されているのかが読み取りづらい感がある。全十四種・竹簡三五〇枚以上、総文字数五万字近くという膨大な分量を一冊にまとめているために割愛された可能性が高いが、文献への理解を深めるためには必要であったように思われる。

また、日本人研究者の論文が引用されることは甚だ少なく、参考文献に挙げられているものを見ると、そのほとんどが中国語に翻訳された論文である。これは本書の責任というよりは、我々への課題と考えるべきではなからうか。本書は、日本の研究者がその研究成果を中国語に翻訳して発表することの重要性、国際交流の必要性を再認識させてくれるものであるとも言えよう。

(草野友子)